

ま え ぼ る に し ま ち

前原西町遺跡

福岡県前原市大字前原字西町所在遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第68集

2000

前原市教育委員会



前原西町遺跡

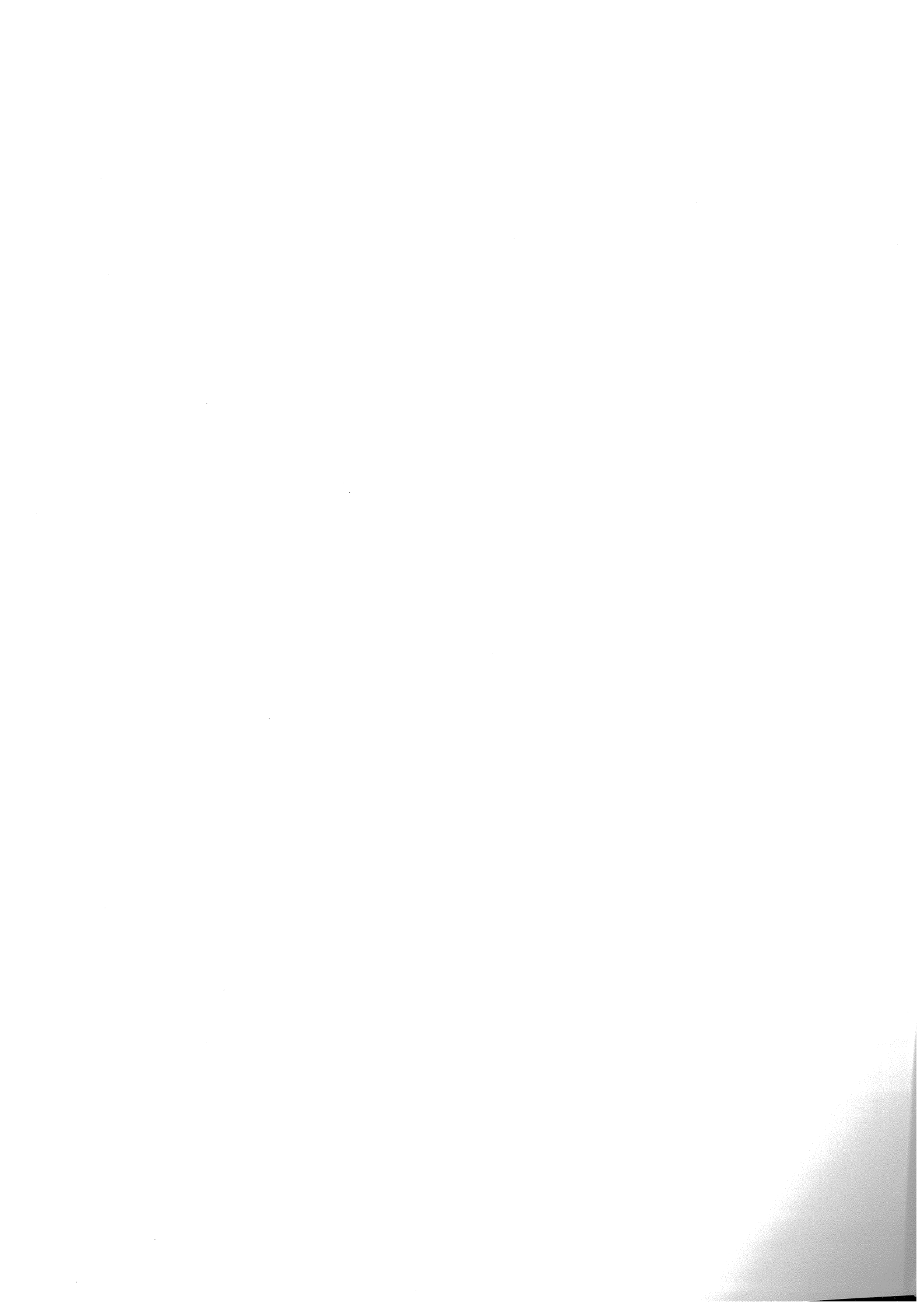
福岡県前原市大字前原字西町所在遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第68集

2000

前原市教育委員会



序

前原市を中心とする一帯は「魏志倭人伝」に記されている伊都国の地に比定されており、弥生時代、古墳時代の遺跡が市内の各所に今もなお、数多く残されています。

近年、市街地を中心に福岡市のベッドタウンとして急激な人口増加・都市化が進んでおり、平成4年には今宿バイパスの開通、平成12年にはJR筑肥線下山門ー前原間が複線化されるに及び、今後、人・物の動きがよりいっそう活発になってまいりました。これに歩調をあわせるように市内の開発計画も増加し、開発に伴う遺跡の調査件数も増加の一途をたどっています。

本書は、高層住宅建設に伴う発掘調査の結果をまとめたものです。初めて旧唐津街道の宿場のひとつ前原宿を調査することができました。この報告書が今後の研究資料として、また、文化財の保護の意識の高揚の一助となれば幸いです。

平成12年3月31日

前原市教育委員会
教育長 坂本 勝喜

例 言

1. 本書は前原市大字前原1164番地における高層住宅建設に伴い前原市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本遺跡は福岡県前原市大字前原旧小字西町に所在するもので、その小字名をとって前原西町遺跡とする。
3. 遺構実測、製図は平尾和久が行い、遺構写真は平尾が撮影した。
4. 遺物実測、製図は平尾が行い、遺物写真は平尾が撮影した。
5. 本書の執筆、編集は平尾が行なった。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の経過	1
II. 調査の記録	2
1. 位置と環境	2
2. 遺構・遺物各説	6
III. おわりに	12

挿図目次

第1図	北部九州における前原市の位置と弥生時代主要遺跡	2
第2図	前原西町遺跡の位置と周辺の主な遺跡 (1/50,000)	3
第3図	前原西町遺跡周辺の地形図 (1/10,000)	4
第4図	前原西町遺跡周辺の遺跡群 (1/5,000)	5
第5図	前原西町遺跡全体図 (1/100)	6
第6図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	7
第7図	1号掘立柱建物出土遺物実測図 (1/4)	7
第8図	排水溜り遺構出土遺物実測図 (1/4)	9
第9図	排水土管出土遺物実測図 (1/4)	10
第10図	1号溝実測図 (1/100)	11



旧唐津街道を伝える標石

図版目次

図1 - a	前原西町遺跡全景（東半部）	14
図1 - b	前原西町遺跡全景（西半部）	14
図2 - a	1号掘立柱建物	15
図2 - b	柱穴4遺物出土状況	15
図3 - a	排水土管遺物出土状況	16
図3 - b	掘立柱建物出土遺物	16



市役所より前原宿を望む

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

萩尾定親氏より前原市大字前原1164番地における埋蔵文化財発掘の届出が前原市教育委員会に提出されたのは平成11年5月7日のことである。既存の古い住宅を解体し高層住宅を建設する計画であった。

申請地を含む前原商店街は唐津街道の沿線に位置しており、当時は前原宿として人々が多く行き来する場所であったことが知られていたため、届出を受理すると、家の解体を待ち試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、表土を30cmほど剥ぐと遺構面となっており、杭を打ち込む高層住宅建設では遺跡の破壊は必至であることから発掘調査を行い、遺跡を記録として留める方向で検討することとなった。

その後、市教委と萩尾氏との間で協議を行い、工程、予算等において合意に達したことから、平成11年8月1日に調査委託契約を締結し、調査を実施した。

調査は平成11年8月18日から平成12年3月15日まで実施し、平成11年度中に発掘調査報告書を作成することとなった。

2. 調査の組織

前原西町遺跡発掘調査にかかる平成11年度の調査組織は以下のとおりである。

調査主体 前原市教育委員会

総括	教育長	坂本勝喜
	教育部長	有田種之
	文化課長	松井 昇
	文化財係長	林 覚
調査	文化財係	平尾和久
庶務	文化財係	濱地 克

現場作業 柏田睦子、岡田りつ子、和多治子、藤森啓子、米山八重子、高橋マツ子、 牧井定代、杉本美知子、原口マツノ、徳永美根子、藤木綾子

遺物整理作業 川上辰子、島影やよい、友池真由美

II. 調査の記録

1. 位置と環境

前原西町遺跡の所在する前原市は福岡県の西部に位置し、福岡市の西端と佐賀県の東端に境を接する糸島半島の付根に位置する。この遺跡を含む前原商店街は唐津藩と福岡藩が参勤交代の時に使用していた若松－唐津間の唐津街道にある14の宿場町のうちの前原宿にあたり、今回の発掘調査地点は番屋にあたと考えられている。また、調査区の南西隅には明治42年に建立された唐津街道標石が今も残っている。

前原西町遺跡の東北東にある法林寺には本陣が、唐津街道沿いに東に進むと町茶屋、脇本陣、代官所などの推定地が存在しており、今回の調査が前原宿の全容解明の端緒となるものである。

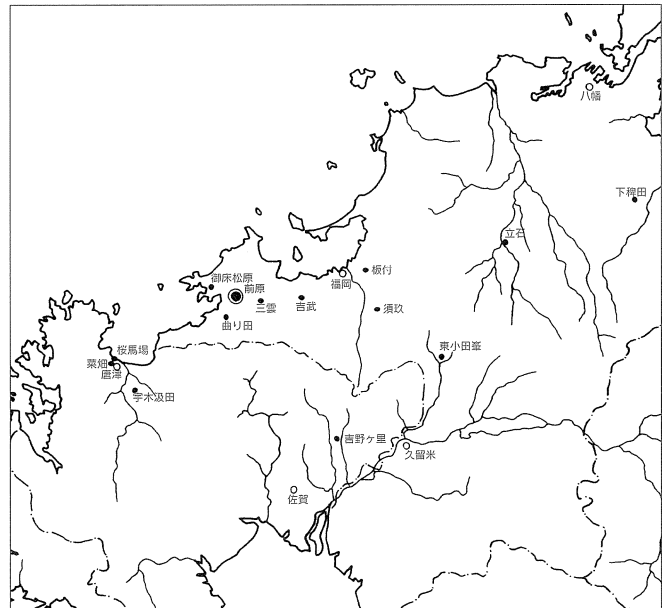
前原西町遺跡は西の加布里湾と東の今津湾より半島内部に湾入してきた糸島水道にむかって突き出した標高8～9mほどの低丘陵の西端部に位置している。この遺跡の500mほど北側に墳丘が完全に削平され、径25mの周溝を残す前原北側古墳が存在する。¹⁾ 低丘陵の最北端には弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である北新地遺跡群を確認しているが詳細な性格は不明である。

前原西町遺跡を含む前原商店街の西南西側には標高70m程の丘陵上に前方後円墳2基を含む16基より構成される萩浦古墳群がある。²⁾ この古墳群では4世紀の割竹形木棺をもつ前方後円墳から8世紀の火葬墓に至るまで当地における墓制の変遷過程をたどることができる。

糸島水道をはさんだ対岸には標高365mを測る可也山の姿が見える。その南山裾には多くの古墳の存在が確認されている。可也山の西側には新町の支石墓を含む、新町・御床松原遺跡群があり、弥生時代初頭から古墳時代にかけての墳墓・集落が確認されている。³⁾ ここは大陸西方から三雲・井原遺跡群へ向うときの最初の上陸地点になるものと考えられ、陶質土器などの外来系土器が住居跡から出土している。ここより、水道沿いに浦志・志登遺跡群を経て、南に陸路を通過して三雲・井原遺跡群に到達したものと考えられる。⁴⁾

三雲・井原遺跡群は東を瑞梅寺川、西を川原川にはさまれた広大な沖積地に展開する糸島最大の拠点集落であると考えられており、1970年代より福岡県教育委員会、前原市教育委員会による、実態解明のための調査がすすめられている。結果、三雲南小路遺跡の弥生時代中期後半の甕棺墓と、その副葬品に示されるように、当遺跡における王の存在が明らかとなった。また、外来系遺物も多く出土しており、弥生時代においてはわが国の対外交流の拠点であった伊都国の性格を強く示しているものと考えられる。

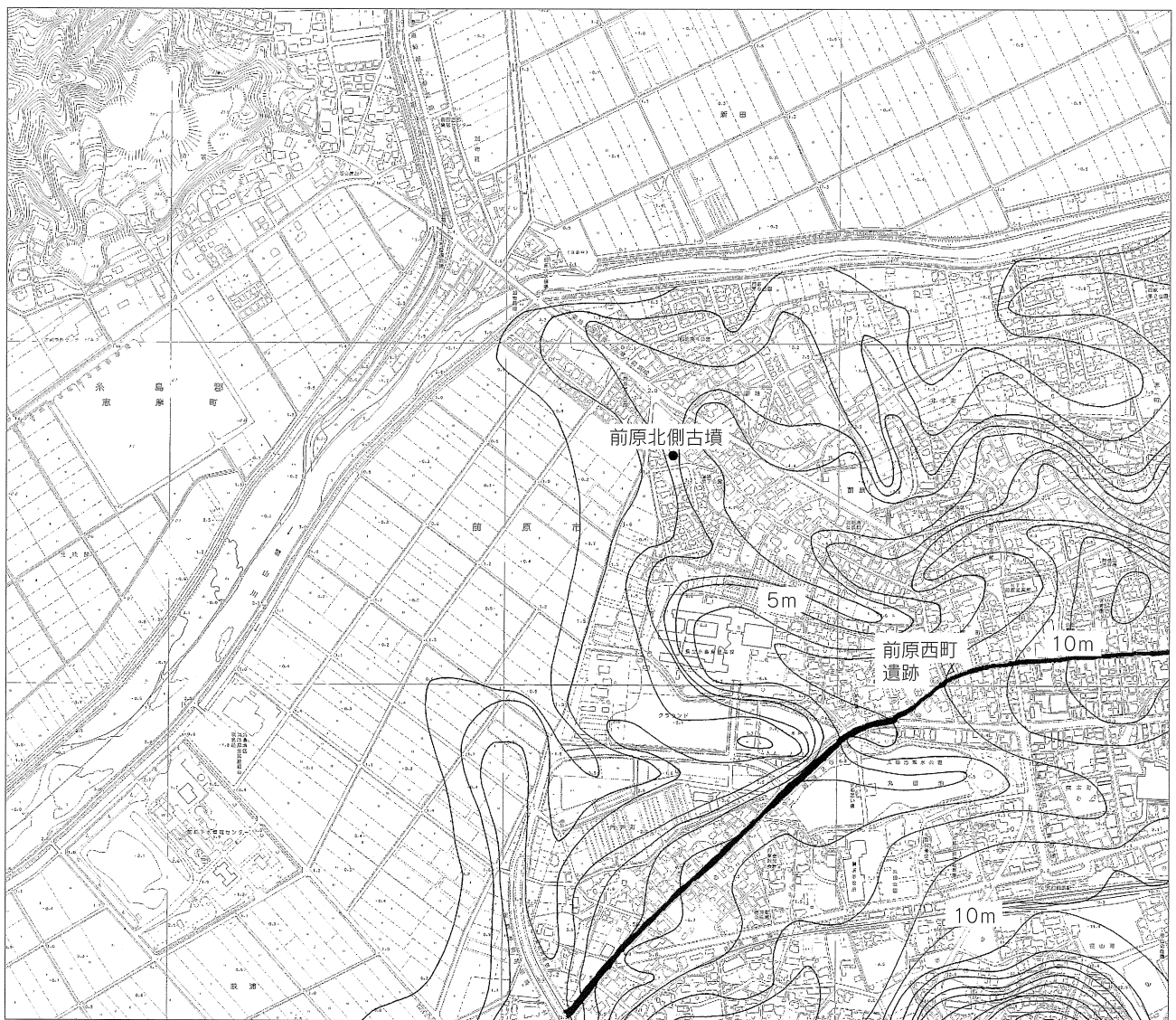
このように弥生時代から古墳時代にかけて、また、ここでは触れなかったが古代においても糸島は遺跡・遺物が多く見られ、調査事例も多く挙げるができるが、中、近世になると、前代とくらべて調査事例が少なくなり、特に近世になると著しく調査事例が減少する傾向がある。



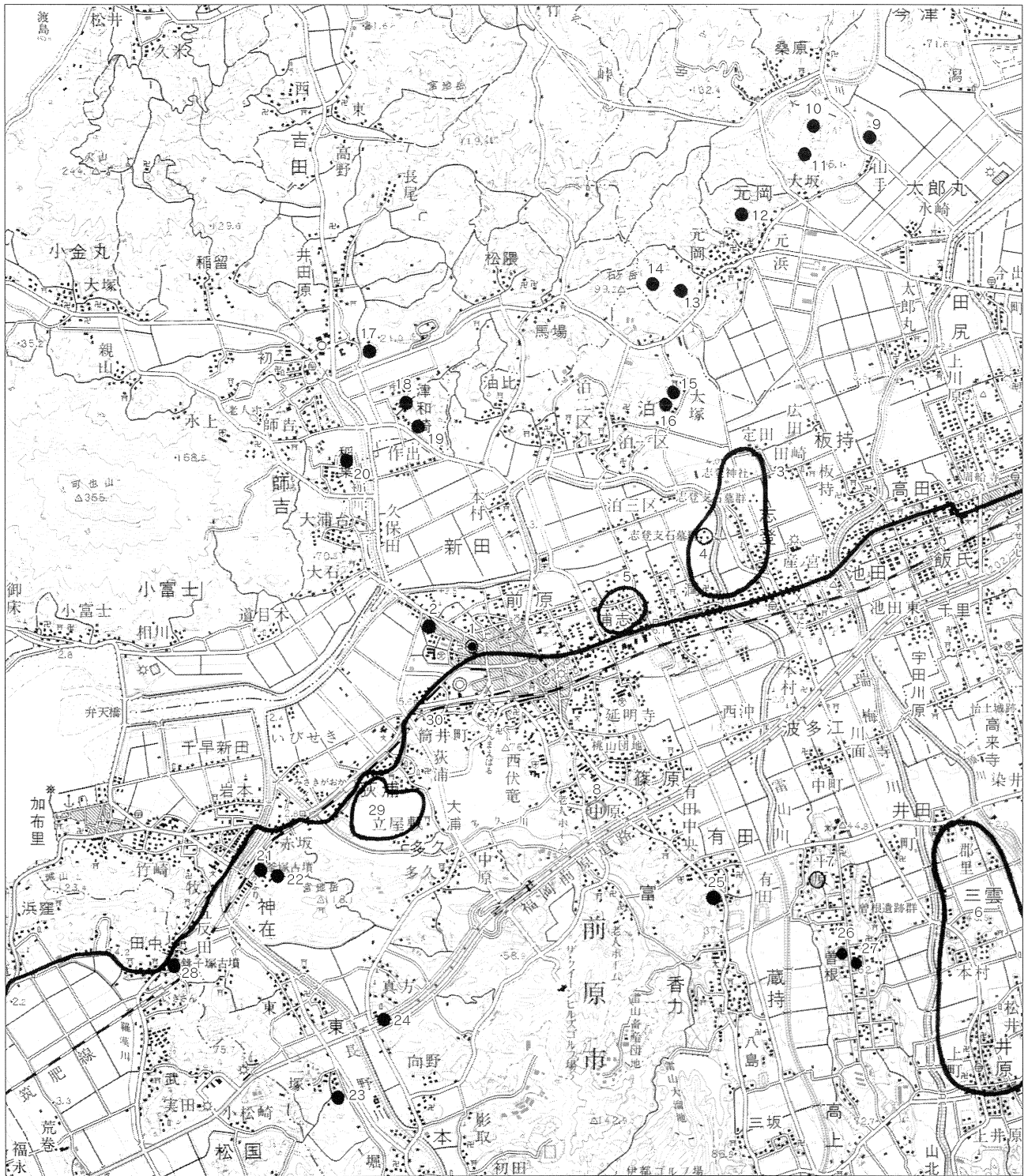
第1図 北部九州における前原市の位置と弥生時代主要遺跡

注

- 1) 平成10年度調査。
- 2) 岡部裕俊 編 (1995) 『荻浦』 前原市文化財調査報告書第58集
- 3) 井上裕弘 編 (1983) 『新町遺跡』 志摩町文化財調査報告書第3集
橋口達也 編 (1987) 『新町遺跡』 志摩町文化財調査報告書第7集 他
- 4) 岡部裕俊 (1998) 「推定される伊都国の構造」『古代探求』
- 5) 柳田康雄 編 (1980、81、82、83、85) 『三雲遺跡』 I～IV 南小路地区編
福岡県文化財調査報告書第58、60、63、65、69集
角浩行 編 (1997) 『三雲・井原遺跡群』 I 前原市文化財調査報告書第63集

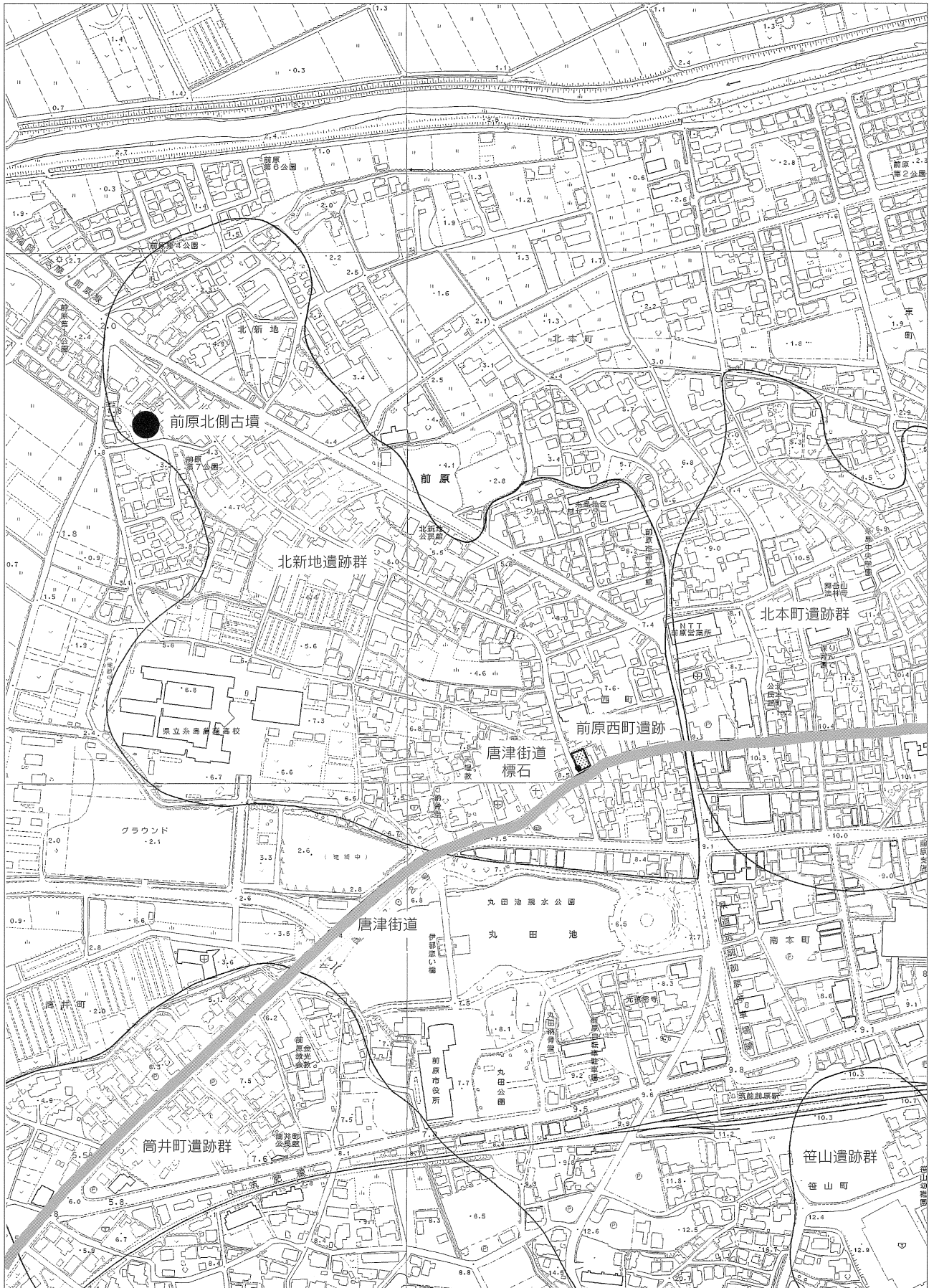


第2図 前原西町遺跡周辺の地形図 (1/10,000)



- 1 前原西町遺跡 2 前原北側古墳 3 志登遺跡群 4 志登支石墓 5 浦志遺跡群 6 三雲・井原遺跡群
 7 平原遺跡 8 上罐子遺跡 9 シオヨケ古墳 10 金屎古墳 11 石ヶ原古墳 12 池ノ浦古墳 13 ミネ古墳
 14 無名古墳 15 泊大塚古墳 16 御道具山古墳 17 四反田古墳群 18 後口古墳 19 権現古墳 20 稲葉古墳群
 21 釜塚古墳 22 神在横島遺跡 23 東二塚古墳 24 東真方古墳 25 有田1号墳 26 ワレ塚古墳 27 銭瓶塚古墳
 28 一貴山銚子塚古墳 29 荻浦古墳群 30 唐津街道

第3図 前原西町遺跡の位置と周辺の主な遺跡 (1/50,000)



第4図 前原西町遺跡周辺の遺跡群 (1/5,000)

2. 遺構・遺物各説

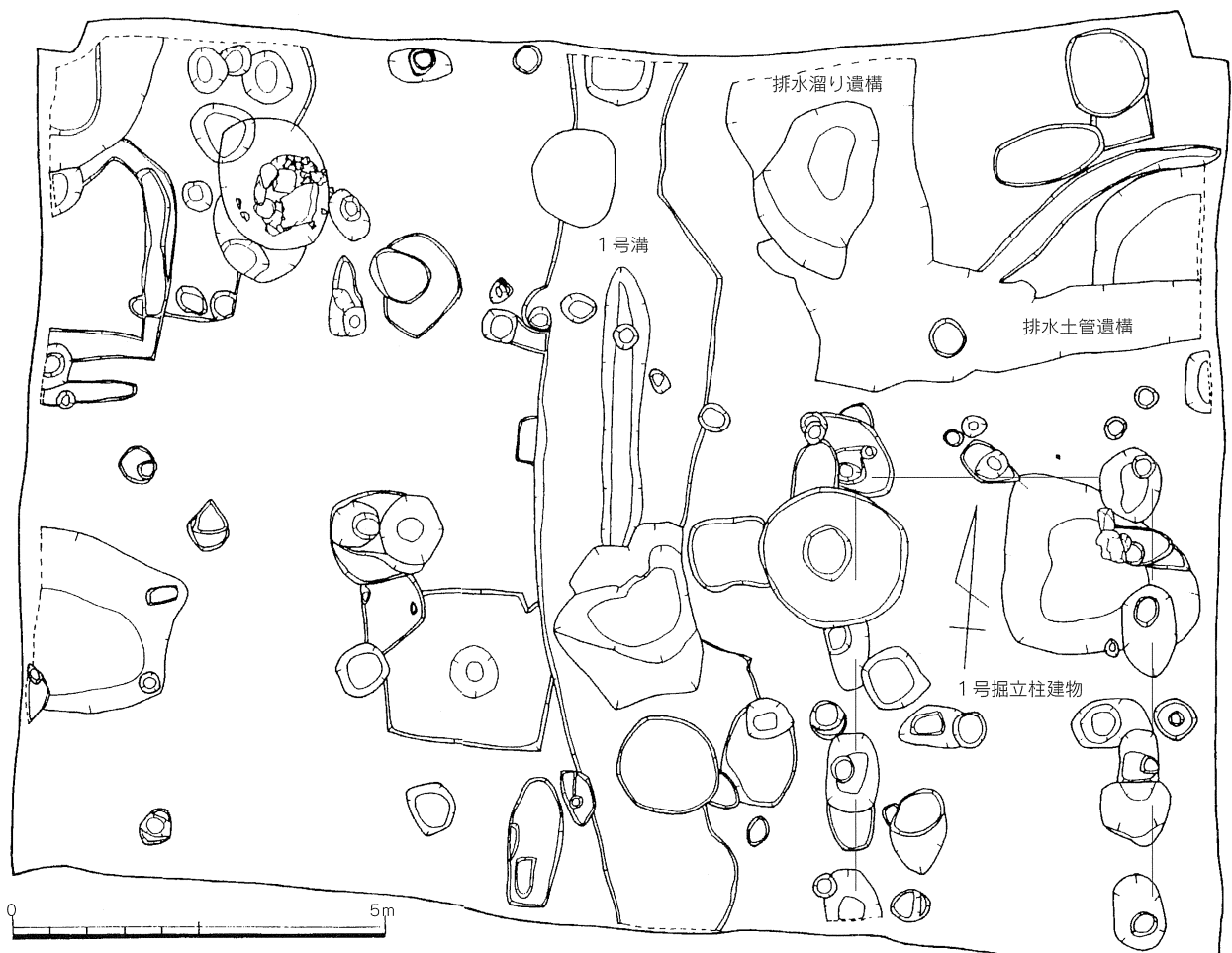
(1) 近世の遺構と遺物

前原西町遺跡は200㎡程の調査面積であり、現地表面より30cmほど下が遺構面となっていた。遺構の時期は大きく分けて2時期に分けられる。ひとつは解体前の建物関連の遺構（解体された建物もかなり古いものであると考えられている）、もうひとつは17世紀中頃～後半の磁器を伴う掘立柱建物遺構である。

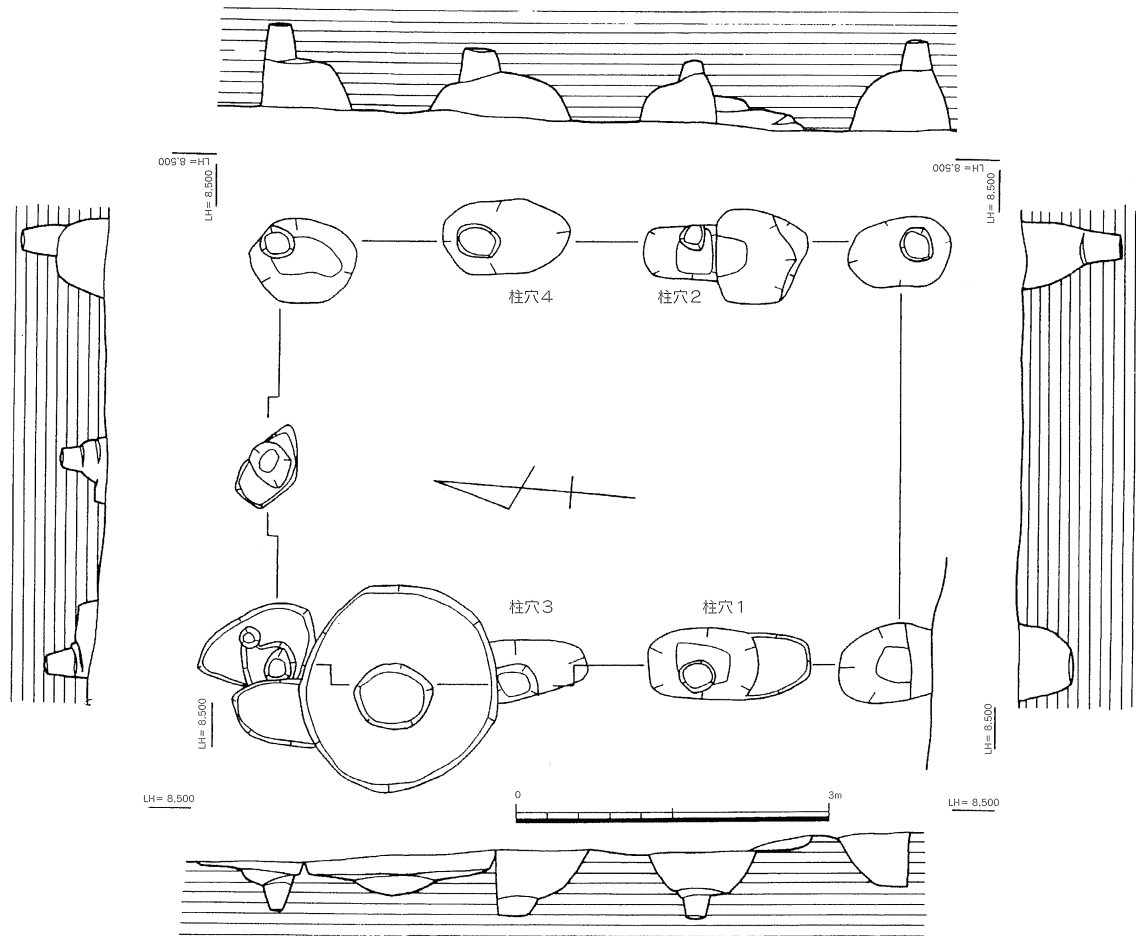
1号掘立柱建物（第6図 図版2-a）

掘立柱建物は調査区の東南東の隅に位置する南北に長軸を持つ1間×3間（？）の建物である。しかしながら、北側を排水土管遺構により攪乱されているためもう少し北側に伸びる可能性がある。また、南側は唐津街道推定路のすぐ傍に小口側を向けてほぼ直角に建てられている。面積は現在確認できる範囲で約24㎡を測ることができる。

柱穴はいずれも平面形1.0×0.8m程の楕円形の掘方プランを持ち、そのまま0.4～0.6m程一段掘りこみ、その後、0.2～0.4mほどの柱を建てた痕だと思われるピットを設けている。各柱穴の深さは個々それぞれ差があるが、同じ建物で問題ないものと考えられる。



第5図 前原西町遺跡全体図 (1/100)



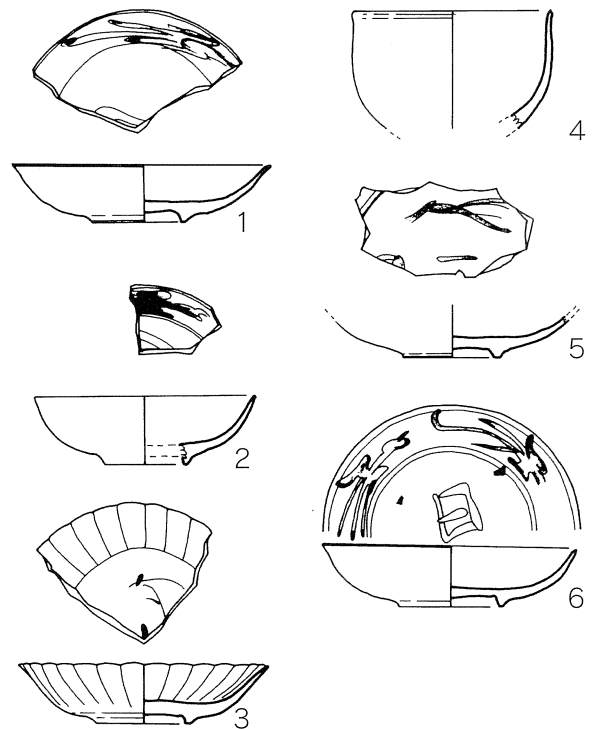
第6図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

出土遺物 (第7図 図版3-b)

出土遺物は染付の皿5点と碗1点がある。

1～4が柱穴1より、5が柱穴2より、6が柱穴4より出土している。

1は復元口径13.4cm、器高3.1cm、脚径4.4cmをはかる。遺物は約1/3程残っている。器表面は淡灰色を呈し、内面の口縁端部と底からの立ち上がり部の境に区画の線を引き、内側に鳥の絵を描く。中央部に何か記してあるが欠損のため詳細不明。2は復元口径11.4cm、器高3.5cm、脚径4.3cmを測るが、残存部が1/4以下のため復元径等にやや不安が残る。2も1と同様な器形であるが、脚から口縁にむかうところでやや膨らみを持つ。内面も口縁と底からの立ち上がり部に区画線を持つのは同様であるが、後者が2本の線になっている。また、区画内の鳥はやや稚拙なものになっている。3はやや厚めの底部を持ち、口縁部にむかって少し外彎しながら開いていく。また、口縁は花卉状になっ



第7図 1号掘立柱建物出土遺物 (1/4)

ている。復元口径13.2cm、脚径5.0cm、器高3.0cmを測る。残存部は1/3程度。内面は底部からの立ち上がり部に青色で区画線を設けるが、始点と終了点がはっきりしている。また、区画線内にも植物状の絵を描く。脚下には砂粒が付く。4は復元口径10.2cmを測る表面茶褐色を呈す碗である。口縁部に小さな面取りを行なう。5は柱穴2からの出土遺物で他の遺物と異なり底部のみの出土である。脚径5.0cmを測る。内面は底部からの立ち上がり部に青色で2本の区画線を施す。また、その内側には絵を描くが内容は不明。脚の下には砂粒が付いていた。6は柱穴4からの出土で復元口径13.2cm、器高3.1cm、脚径5.4cmを測る。約1/2残っている。6も2と同様な構図であるが、鳥の頭部の形態が大きく異なる。また、2本の区画線の内側には「日」状の記しが認められ、底部の端には重ね焼きの際の跡が残る。脚下には砂粒が残る。6の類例に佐賀県掛の谷2号窯出土例や、長崎県万才町遺跡出土例がある。

(2) その他の遺構と遺物

掘立柱建物の他に遺物が集中して検出されたのは、調査区北東に位置する排水溜り遺構と排水土管遺構である。まず、排水溜り遺構に貯められた水が排水土管を通り調査区外に位置する排水溝に流れ込む構造になっており、調査時まで機能していた。

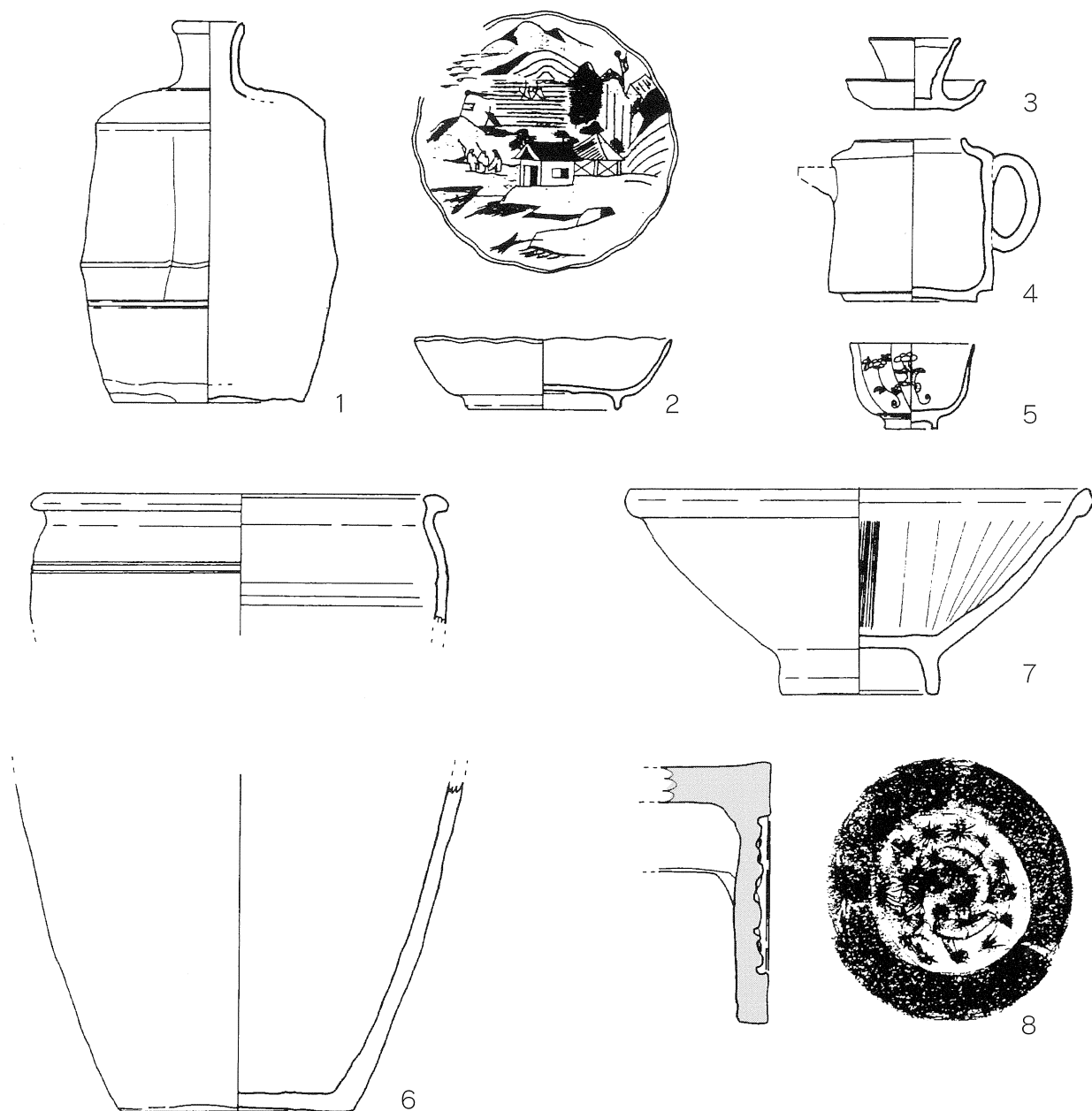
排水溜り遺構

排水溜り遺構は調査区の北東に位置する。平面形は溝状で幅2.5m、長さ3.5m + α を測り、北側に向かって調査区外に伸びている。排水溜り遺構の大きな特徴はその中央部のやや西側に長軸2.0m、短軸1.45m、深さ0.7mを測る深い土坑を備えていることである。第8図の1・4は土坑の最も深い地点から検出した。2・3・5～8は土坑の北側の溝状遺構からまとめて検出した。

出土遺物 (第8図)

排水溜り遺構から出土した遺物を8点図示している。

1は口径4.0cm、器高23.0cm、底形11.4cmを測る。外面はオリーブ色の釉がかかっており、内面は茶褐色を呈している。頸部の付根から緩やかに落ちていく肩部には、焼成時における重ね痕が6つ確認される。肩から胴部最大径部にむかい、内彎しながら広がっていく。そこからは、窄みながら底部にすすむ。底部から2cm程はケズリを施す。また、胴部中位において大きく胎土を摘み把手状にしている。酒瓶に用いたものか。2はほぼ完形の皿である。口径15.0cm、底形8.8cm、器高4.2cmを測る。内面は青色で山水人物画を描く。3は完形の灯明皿である。口径5.5cm、器高4.4cm、底形4.8cmを測り、オリーブ色の釉を施す。4は排水溜り遺構の深い所から出土したポット状容器である。注ぎ口が一部欠落するがほぼ完形品である。表面には薄いオリーブ色の釉をかけているが所々地肌がでていところがあり、ムラが多い。5は碗である。口径7.5cm、器高5.2cm、底形3.2cmを測りやや小型である。脚下には砂粒が付着する。脚部と立ち上がり部の境に青色の線を施す。その上に縦に区画線を設け、それぞれ花の絵を描く。6は同一固体であると考えられる甕である。復元で口径31.2cm、底径17.4cmを測る。口縁端部は丸くおさめ、暗茶褐色を呈する釉が口縁下にある胴部最大径部までかかっている。7は摺鉢である。復元口径34.2cm、脚径11.7cmを測る。口縁部には粘土帯を貼りつけており、玉縁状に調整している。脚部は貼りつけ高台である。9は軒丸瓦である。瓦当径15.4cmで、内区を右巻きの三巴文、外区を16個の珠文で構成している。周縁の幅は2.8cmを測る。



第8図 排水溜り遺構出土遺物実測図 (1/4)

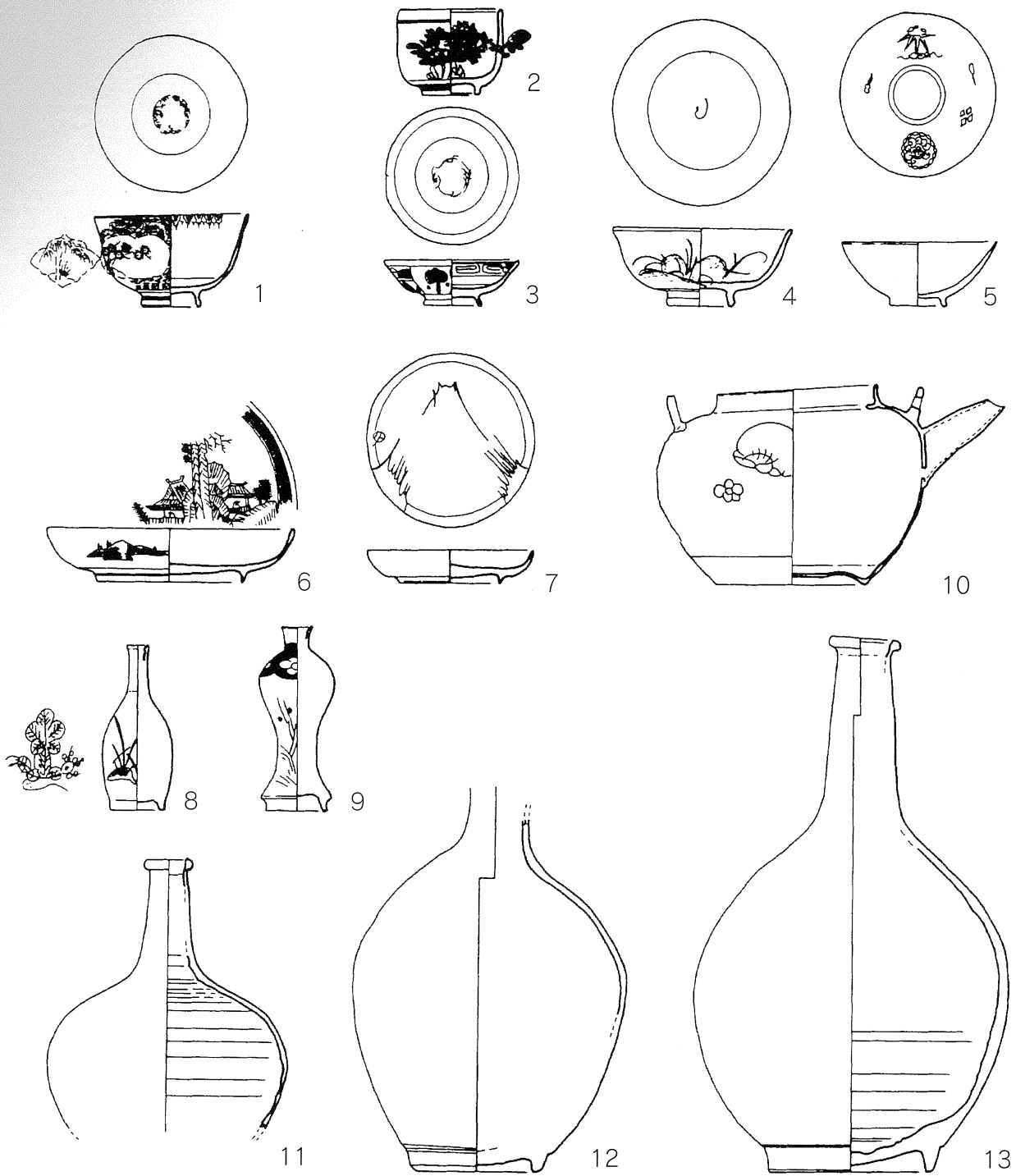
排水土管遺構

排水土管遺構は排水溜り遺構の東側に接している。土管は東に向かうにつれてレベルが下がって、排水溝につながっている。遺物は土管を埋設した後、その両脇に置かれていた。小片など図示できない遺物も多いが、比較的残りの良い物も多い。土管をはずし、掘方を確認したが、そこからの出土遺物はほとんどない。

出土遺物 (第9図)

排水土管遺構から出土した遺物を13点図示している。

1～5は碗である。1は口径10.0cm、底径3.7cm、器高5.7cmを測り、外面には竹と松を記す。



第9図 排水土管出土遺物実測図 (1/4)

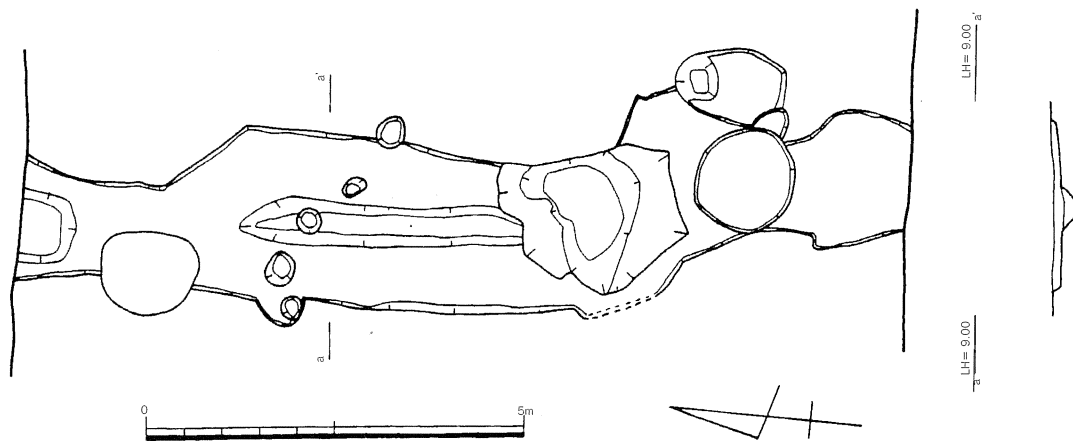
2は1より小振りで、外面に植物を記す。3は口径8.5cm、底径3.6cm、器高2.9cmを測る。外面は小さく分割して植物を描く。4は口径11.4cm、底径4.1cm、器高4.9cmを測る。碗自体は青灰白色を呈しており、上に青色で植物を描く。5は口径9.9cm、底径3.6cm、器高4.0cmを測る完形品である。6・7は皿である。6は1/4程残存して

いる。内面には山水人物画を描いているのか。口径15.8cm、底径9.4cm、器高3.3cmを測る。7は小皿で内面に山を描く。8・9は花瓶か。8・9ともに10cm程の器高で、植物文を施す。10は急須でほぼ完形で残っていた。上半部をカキ目状の調整を施し、上に花を描く。11も花瓶か。底部を欠き、現存で器高16.0cmほどを測る。器表面はオリーブ色を呈す。12・13は徳利か。13は排水土管遺構最上層に位置し、遺構面検出の際に胴部を打欠いているが、もともとは完形品であったと考える。12・13ともにしっかりした高台を持ち、器表面は白色を呈す。

1号溝 (第10図)

1号溝は調査区のほぼ中央に位置しており、最大幅2.75m、深さ0.3mを測る。溝は南北方向に伸びており、それぞれ調査区外に伸びているものと考えられる。溝の底部中央部に小溝を設けてあり、1号溝と同様に南北方向に長軸を持つ。しかしながら、南側の端部を大きな攪乱土坑に切られているために正確な規模は不明である。幅1.0m、深さ0.15m程を測る。溝のほぼ中央部に径0.2m程の小ピットが東西方向に連なって検出された。ピットからの出土遺物はない。

1号溝関連で出土した遺物で図化したものはないが、比較的小片の遺物が中心であり、量も多くない。また、その時期は主として近世以降の遺物である。したがって、出土遺物と周辺の遺構の時期から見て近世以降の遺構であると言える。



第10図 1号溝実測図 (1/100)

Ⅲ. おわりに

今回の調査は町中でかつ道路沿いで発掘調査であったため、市民の感心呼び、また見学者も多かった。現場で配布していた調査速報も、短い調査期間ではあったが3号まで発行することができた。また、調査終了後、地元の商店街の人々より、地域の歴史を学ぶ勉強会のために市教委に講師依頼が行なわれるなど、この調査がわずかながらでもあるが、市民の文化財保護思想育成のきっかけになったことはとてもうれしいことであった。

しかしながら、前原西町遺跡の調査が前原市初の宿場町の発掘であったにもかかわらず、遺跡の具体的な性格にまで迫ることができず、遺構と遺物の紹介に終始してしまったことは残念なことである。

今後は家の建て替え等々、機会を捉えて調査を続けることにより唐津街道沿いの一宿場町全体の様相を把握していかなければならないと考える。



現地に残された唐津街道標石と建設中のマンション

圖 版



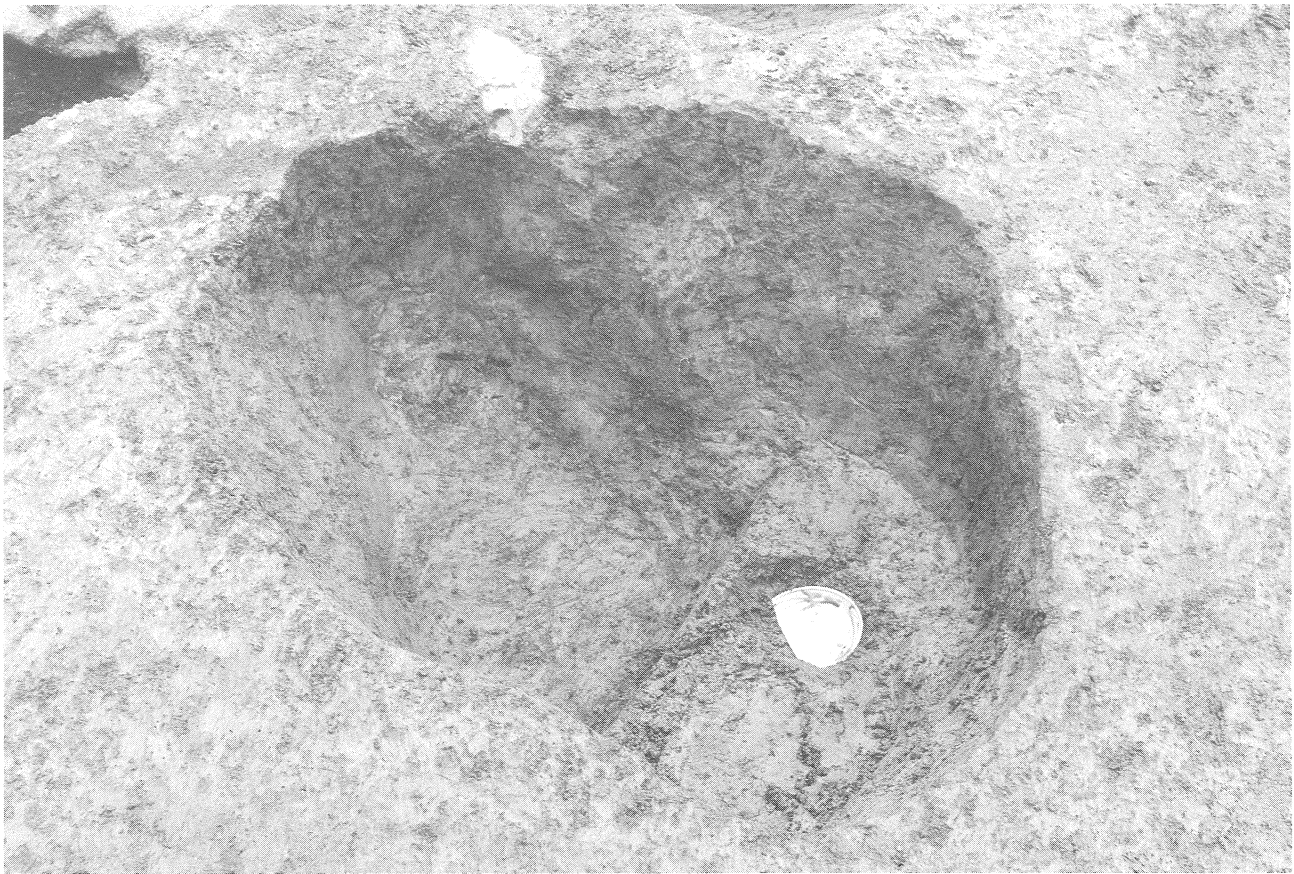
a. 前原西町遺跡 全景（東半部）



b. 前原西町遺跡 全景（西半部）



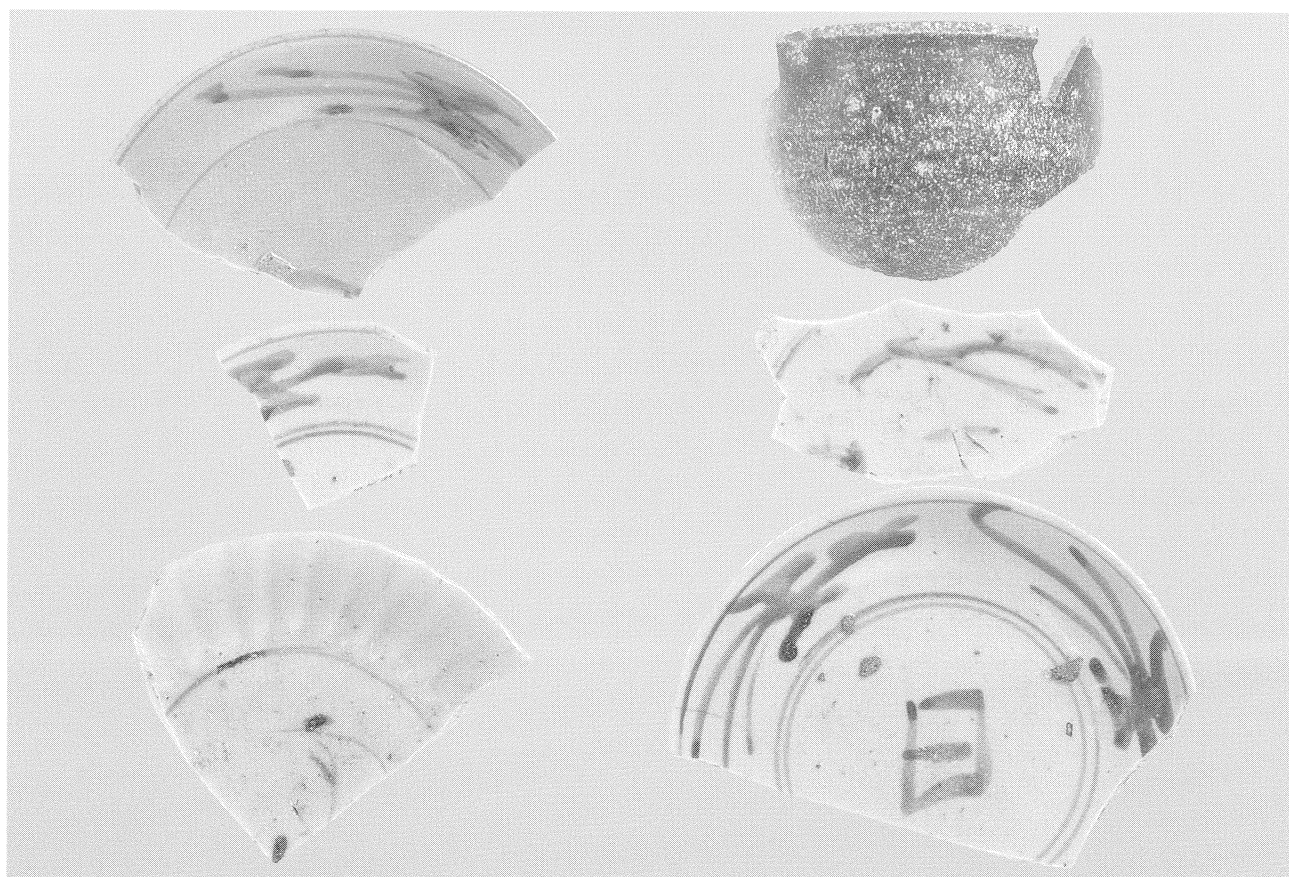
a. 1号掘立柱建物



b. 柱穴4. 遺物出土狀況



a. 排水土管 遺物出土状況



b. 掘立柱建物出土遺物



報 告 書 抄 録

ふりがな	まえ ばる にし まち い せき							
書 名	前 原 西 町 遺 跡							
副 書 名	福岡県前原市大字前原字西町所在遺跡の調査							
巻 次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第68集							
編 集 者 名	平 尾 和 久							
編 集 機 関	前原市教育委員会							
所 在 地	〒819-1192 福岡県前原市大字前原623番地							
発行年月日	平成12年(2000)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
まえばるにしまちいせき 前原西町遺跡	福岡県前原市 大字前原			33° 33' 26"	130° 11' 54"	1999.8.18~ 2000.3.15	約200m ²	高層住宅建設
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構			主 な 遺 物		
前原西町遺跡	宿場町	江戸時代(近世) ~現代	掘立柱建物			磁 器		

前原西町遺跡

前原市文化財調査報告書

第 68 集

平成12年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印刷 株式会社 重富印刷



前原西町遺跡

前原市文化財調査報告書

第68集

2000

前原市教育委員会